

# グループの連帯でまちづくりを進める

## NPO 法人 めむの杜（芽室町）

閑散としていた駅前通りがにわかに活気づいた。十勝・芽室町の総合まちづくり集団、NPO法人「めむの杜」が2010年10月、同町JR駅前に開設したコミュニティ・レストラン「まちなかひろば」の開店当日。女性グループが来る、高齢者夫妻が訪れる、子ども連れの若いお母さんが顔を見せる。ランチをほおばり、お茶を飲みながら楽しい会話がはずむ。店前の道路では「何ができたんだろう」と、通りすがりの町民が興味津々の表情で店内をのぞき込む。つい数日前まで空店のシャッターで閉ざされていた町並みが嘘のようだ。「みんな、こんな出会いを待っていたんだ」レストランを運営するスタッフも喜びにわいている。いわず語りに到達した全員、力を合わせての新しい試み。成功するもしないもスタッフの心意気と、地域の人々のバックアップいかにかかっている。数十年も連綿と続いていたこの町のまちづくりの歴史に新しいページが加わった。

### ■ 長い歴史と伝統を刻むまちづくり

芽室町は心にやさしいまちだ。まちなかに開拓前の原野の面影を止める柏の大木が何十本も残り、凜と天をつくトドマツの防風林が延々10 kmも続く。市街地の四つ角を曲がると、アイヌの伝説の小人神“コロポックル”の彫刻がヒョイと顔を出し、公園では天に両手を挙げた子どもの群像が、集まった幼稚園児を暖かく見守る。



こんなお店がほしかったと、「まちなかひろば」でランチを楽しみ、会話を弾ませる町民たち

そんな地域風土は人々に思いやりの精神を育くまずにはおかない。開町以来、色々なボランティアやまちづくり運動が活発だ。今はすっかり高齢者のスポーツに定着したゲートボールは、戦後間もない1947年（昭和22年）の混乱期に、子どもたちの健

全な遊びがないことに心を痛めた一町民が、欧米のクロッケーにヒントを得て生み出した同町発祥の子供のスポーツだ。その流れは今日、同町で盛んな「イクメン」（育児をする男性）、「パパスイッチ」（ママと交替して子育てに当たるパパ）事業などの住民活動に生きている。

こうした子育て支援をはじめ高齢者援助、障がい者の手助け、世代間交流なども極めて活発。それも一つのジャンルに三つも、四つものグループが存在する。子育てに例を取ると、妊婦に対する先輩お母さんの助言や注意、若い母親に対する子育て支援、幼児には絵本の読み聞かせや遊び相手、児童・生徒には学童保育やスポーツの伝授、図書館へのいざないや演劇指導など、多くの町民が自分のできる分野でお手伝いできるといった具合。

そのこと自体はすばらしいことだが、いまひとつ不足の部分があった。活動自体タテ割り、横のつながり、つまり各団体の連携やコミュニケーションに乏しかったのだ。そのことは各グループとも感じていて「これでは町民ぐるみ手をたずさえたまちづくりは難しい」と、誰いうとなく、どうすればそれが実現できるかを検討する任意団体「私たちのまち育て研究会」を発足させた。有志が集まって何度か話し合いをするうち、若い親や子ども同士のつながりが薄い、高齢者の孤食や偏食が多い、身障者に対する正しい知識や理解が不足、生活支

援や就労についても地域支援が十分でないなどがあぶり出された。これらに共通するのは“孤立化”だった。ではそれらの課題を総合的に解決する方策は何だろう——導き出された結論はNPO法人を作り、個々の活動は続けながらコミュニティ・レストランを開くことだった。

コミュニティ・レストラン（略してコミレス）とは、食を核にした地域支援を目的に作られた事業型の市民活動モデル。わかり易くいうと、みんなが集い、食事を大切にしながらまちづくりを語り合い、助け合って実行する場、とでもいおうか（この冊子・コミレス、余市テラス参照）。現在、道内外に「地域食堂」のような形で次々と誕生しており、子育て世代の相互支援や高齢者の生きがいの場づくり、安心安全な食や地産地消の促進、地域情報の発信の場づくりなど、食を中心として人と人が出会い、ふれ合う地域の拠点となっている。

#### ■「めむの杜」発足、活動開始

こうした発想を前提に「まち育て研究会」は2008年発展的にNPO法人「めむの杜」に切り替わった。この名は、「めむ」がアイヌ語で水がわき出る所。つまり泉。泉には沢山の動物が集まる。そこに地名の上二文字「めむ」を引っ掛け、さらに多くの人が自然発生的に集う場所「杜」を絡めて命名した。

設立当初の目標は「つながりを作ろう」。「めむの杜」の名はまだ知られておらず、何をする団体かも不明なので、まずみんなに知ってもらい、つながりを持ち、共感を得ることが大切と判断したのだ。最初に手掛けたのは農家とのつながり。有志数十人が会員の一員の農家へ出向き、農業体験をすると共に、地元で採れる野菜の知識を勉強。

芽室は畑の耕地面積約 2 万畝、小麦、馬鈴薯、甜菜、スイートコーンなど米を除く野菜なら何でも穫れる国内でも有数の農業王国。味も一番。これを地元で食べない手はないと体得。

次に図書館に通う市民のコミュニケーションの場として館内に直営の喫茶店を開設。若い人からお年寄りまで本を読む合間にお茶を飲み、日常会話や読書感想などを話し合いながら、知り合いの輪を広げる。館内にはボランティアの何人かが常駐し、朗読会や館の裏側を見学するライブラリースクールなどを随時開催して、館への親しみや再訪を促している。

さらに町と観光協会が、市街地の活性化のために中心市街地の空き店舗で月 2 回行っている「ゆうやけ市」に特別参加。会員らが農家から寄贈されたおもちゃかぼちゃをハロウィンのランタンに彫る実演販売に挑戦し、町、協会をはじめそれに参加した他の業種の人たちや訪れた市民に「めむの杜」をPRし、交流を深めた。



図書館に開設の喫茶店も「めむの杜」の大事なコミュニケーションの場。中学生グループの会話も楽しそう

この間、開店準備として既に地域食堂を開設し、成功している石狩市や、ワンディシェフ（一日料理人）方式でユニークな食堂経営をしている釧路・浜中町の霧多布湿原観光センターなどを実地見学。また、「コミレス」開店の提唱者の東京・国分寺市、特定非営利活動法人NPO研修・情報センターの代表や、道内の推進代表らを招いて店経営の狙いやノウハウをみっちり勉強。さらに実践が大切と、2009 年から 10 年にかけて毎月 1 回、公民館で「産直ランチ」と銘打ち、地元産の食材を中心とした料理を、会員の主婦が一日シェフとなって市民に提供。前後 9 回行ったところこれが大好評で、毎回 40 食前限定があつという間に売り切れ、食べる側も作る側も大満足。事後のアンケートでも「あんなレストランがまちなかにいつもあるといいね」の意見が沢山寄せられていた。

## ■ 待望のコミレスオープン

これに自信を得た会員らは 2010 年、10 月初旬の開店を目指してエンジン全開。店はまちのど真ん中の駅前通りの空き店舗、店名はだれでもいつでも集えるようにと「街なかひろば」と決定。



「まちなかひろば」開店で、にわかになぎやかさを取り戻した駅前通り

資金はそれまで貯めていた正会員 30 人の会の積立金のほか、趣旨を理解して協力してくれた労金の「まちづくり助成金」を充当。それでも十分でないので椅子、テーブルは町商工会からの借り物、上のクロスや食器類は会員の自宅からの持ち寄り。また仲間が仲間を呼び、店内はそれらしくデコレーションされ、会員手作りの小物グッズや壁の絵画なども整い、10 月 5 日、満を持してオープンした。待望のコミュニティ・サロンとあってその後は連日、千客万来。遠くは滝川、札幌からも。提供する野菜中心料理と、日替わりで行う音楽や講演会も好評で、これに賭けてきた小寺卓矢理事長（39）や、これまで実質的に会を引っ張っ

てきた正村紀美子前理事長（44）らは大感激。今回の開設は実験開店なので 10 月いっぱいまで閉店したが、常設店にする手応えを強く感じている。正村前理事長は「みなさんのお陰でここまで来れました。コミュニケーションの実も次第に実現しつつあり、本当に嬉しいです」とにっこり。ずしり責任を背負った小寺理事長は「活動は始まったばかり。今回は暫定 1 ヶ月でしたが、今後は常設で、男の人たちも集えるように夜の部も手掛けてみたい。お世話になった町民はもとより各地のコミレスの人たち、まちづくりに携わる人たちとも交流を深め、本当の宝物は地元にある（芽室の場合はおいしい野菜と人）ことを確認してゆきたい。まちづくりの原点はそこにあると思うんです」目を輝かして語っている。

### ■ 連絡先

事務局：〒082-0012

芽室町東 2 条 4 丁目 17-5 小寺写真館

TEL：080-3296-1777（正村 紀美子）

080-3293-3538（団体）

Email：mori@memunomori.net

URL: <http://blog.memunomori.net>